

## 病棟保育職の現状と課題

鈴木 裕子

(平成11年9月30日受理)

### The Present and Future of Nursery Teaching for Pediatric Wards in Hospitals

Yuko SUZUKI

(Received on September 30, 1999)

#### はじめに

入院児のトータルケアを考える時、看護とともに安心と満足のできる環境を提供することが求められ、医療や看護スタッフと共に保育職が病気の子どもを支えるシステムに組み込まれることが望まれる。現段階では、病棟内保育の必要性が高まる中厚生省の試行が療養所を対象として着手されるなどの動きはみられるが、一般的には保育士の配置は病院側の個人的努力に依るところが大きい。また、保育士の必要性についても長期入院患児の為の存在といった域を脱しきれていない。しかしながら、現実には短期入院児が多くなってきており、入院期間に限らず全ての入院児に発達保障と生活の変化を受容し治療を受け入れる為の支援が求められてきている。また、原則的には基準看護であることから、病棟内での生活のQOLを保障するといった点から、医療職や看護職とは異なる心理的ケアや生活全体をとらえてサポートする専門職の配置が必要不可欠であると考えられる。

これまで保育士は病棟内の子ども達に共感的に関わり生活を支えてきたことでは大きく貢献してきた。生活の援助や遊びの提供は勿論、子どもや家族の心理的サポート、発達のニーズをとらえた対応など、その有用性につきては数多く検証されてきている。しかし、このような実績がありながらも保育士の導入はなかなか困難な状況であることも事実である。更に、専門職としての役割や位置づけも今だ明確にされていない。病棟内保育を一層充実させて行くために、また、病棟環境を充実させるためにも保育職を病棟スタッフとして位置づけ、その役割を確立することが早急に求められている。

そこで、今回、過去に実施した調査内容をふまえ、新たに調査を行ったのでここに報告する。前回の調査結果もふまえながら、それらを通して現状の問題点を明らかにし、保育職が専門職として確立して行くための方向性について検討する。

#### 方法

全国医療保育研究会の会員の中から、保育職の会員を対象としてアンケート調査を実施した。得られた回答のなかから病棟保育士の回答47名分を抽出し今回の資料とした。病棟保育士からの回収率は70.1%であった。

調査期間は平成10年12月から平成11年1月である。

調査内容は経験年数・勤務の実際・入院児の特性・保育環境・保育の実際・家族支援の実際・病棟保育職について感じていることなどである。

#### 結果

〔保育士の経験年数〕

経験年数は1年から34年まで広く分布している。経験6年が最も多く(13%)、10年未満が70%を占めている。また、病棟以外の他の期間での保育経験を有する保育士がほぼ半数(48%)認められた。

〔勤務の実際〕

病棟の保育士数は1人から7人というところまでであるが、一人勤務が多い(36.9%)。また、勤務は日勤の場合が多い(62.5%)。

〔入院児の特徴(保育対象)〕

保育の対象は幼児期の子どもがもっとも多いが、未熟・新生児から高校生まで広い年齢層を対象としている。また、隔離児(54.3%)、無菌室児(45.6%)、重症児(39.1%)さらには家族が付き添っている児(54.3%)も保育

の対象としている点は見逃せない。

また、入院期間をみると2週間以内がもっとも多く、次いで1ヵ月未満、3ヵ月未満というように長期に亘る入院ほど少ない傾向にある。

〔保育環境〕

表1 保育環境 %

	充 分	不 充 分
保 育 教 材	63.0	37.0
玩具・遊具	31.9	68.1
図書・雑誌	53.2	46.8
装 飾	63.8	36.2
行 事	61.7	38.3
保 育 室	29.8	70.2
面 接 室	12.2	88.8
保 育 予 算	38.6	61.4

いずれも十分ではないが、ことに保育室や面接室の設置に関しては早急に改善が求められる。

〔保育の取り組み〕

表2 保育に関して %

	おこなう	あまり	おこなわない
目 標	56.8	34.1	9.1
計 画	54.5	36.4	9.1
評 価	50.0	36.4	9.1
記 録	53.3	40.0	6.7

おおむね、保育を組織的にとらえて実践している様子はおこなうが、ただし、おこなう、と、あまり・行わないに大別し、積極的と消極的として比較すると、50%強が積極的な取り組みを行っているがそれ以外では今後に向け専門性を高めて行くためには改善が求められる。

〔病棟内の連携〕

表3のとおり、スタッフとの申し送りには78.1%が積極的に参加し、看護婦との打ち合わせは必要などきに行う場合が多い(47.8%)。また、カンファレンスには69.6%が参加している。話題の内容は表3に示すとおりであるが、保育的な視点が求められる内容も多い。

〔業務内容〕

表4 業務の実際 %

	毎 日	たまに	な し
食 事 介 助	82.2	17.8	0
排 泄 介 助	80.0	20.0	0
入 浴 介 助	44.4	26.7	28.9
衣服の着脱	68.9	22.2	8.9
歯磨き洗面	55.6	22.2	15.6
環境整備	78.3	19.6	0
測定介助	11.1	46.7	40.0
検査介助	11.1	46.7	42.2
与 薬	17.8	46.7	33.3

あえて分類すれば、生活に関わる内容が多いものの、必要に応じて測定介助など、看護的な内容に関わることも認められる。

〔保育職について感じること〕

病棟における立場の不明確さを指摘する意見が多い。(表5)また、よりよい保育をめざす姿勢がうかがえる。

考 察

病棟の保育環境をとらえる時、苦痛を伴う病室とは異なる遊びの空間としての保育室は必要不可欠である。単調になりがちな生活に潤いを与え、気分転換をはかるためにもベット上とは異なる空間は必要となろう。また、入院の時期や病状によっては集団参加が困難な子どもたちもおり、個別的な対応の必要性も高いことがうかがえる。

表3 申し送り・打ち合わせ・カンファレンスの内容

申し送り		打ち合わせ		カンファレンス	
	MA		MA		%
子どもの様子	74.3	行事の連絡	31.4	家族に関して	25.7
医療・看護	28.6	病児の状態	28.6	治療・看護	25.7
家族	20.0	保育に関して	28.6	生活に関して	25.7
保育	11.4	家族に関して	8.6	子の状態と対応	25.7
授乳・食事	11.4	検査について	8.6	業務内容	14.3
連絡事項	22.9	成長・発達	8.6	保育の内容	8.6
その他	5.7	食事に関して	5.7	ケースの検討	5.7
		その他	11.4	その他	11.4

表5 保母職について感じること

分 類	記 述 内 容
病棟における立場 (63%)	中途半端な存在である。専門職として位置づけられたい。
人数の増員 (44%)	保育の質を向上させるため、きめ細かな関わりのため。
病棟の必要性 (34%)	精神面のケア、生活の充実、病棟の環境構成、家族支援。
学習意欲 (31%)	医療・看護面の知識、保育技術の向上、研修会等への参加。
スタッフとの連携 (28%)	スタッフと話し合い・情報交換の場を多く持ち連携をはかりたい。
業務との関係 (19%)	保育以外の業務におわれる。子どもと十分な関わりがもてない。
その他 (13%)	自信がなくなる。保育士の定着が困難。など

る。あわせて乳幼児に限らず学童や中学生・高校生もその対象とする点を考慮すれば、保育室と同様に面接室などの空間も確保する必要がある。入院による心理的な不安感や学習面の不安については個別的な対応が余儀なくされる。学童期以降の学習面については院内教育や派遣教師という形で対応されているものの、すべての入院児に保障されるまでま行き渡っていない現状を考えれば、保育者が学習面も個別的に支えていくことが求められる。そのためには学習できる場はぜひとも必要となる。このようなことから多目的な空間として面接室を活用することは大いに考えられる。

さらに、保育士の役割の一環として家族支援も大切な柱であることを考えれば、家族と悩みや不安を話し合える場の確保が求められる。

更に保育に関してみると、短期入院児が多いことあるいは疾患の多様性など実際上の困難さは伴うであろう。しかし、いずれの場においても保育者と子どもが出会うときは保育的な関係が結ばれてしかるべきであり、発達や生活の保障に向けた見通しをもった活動の展開が求められる。病棟における保育の質の向上、あるいは専門性の確立という点からは保育者の活動内容を組織的にとらえその効果を明らかにしていく努力を行う必要がある。この点では保育者の個人的な意欲に期待するところが大きい。ただし、多くの病棟は保育者が一人であり、中には看護業務や補助などを併せて行っている状況もある。つまり、保育の専門職としての役割だけが期待されているわけではないと言った状況もあり、それが保育職としての本来的な業務の遂行を困難にしている様子はうかがえる。この点では、他職種とは異なる職域を持つ存在としての保育職の役割について理解をはかっていくことが求められ、ひいては導入効果を明らかにすることでスタッフとしての保育職の位置づけを明確にしていく必要がある。

ろう。

入院児のQOLの向上に向け、病棟の子どもたちにとって、子どもの立場にたつ保育者の役割や存在意義は理念的には理解されているものの、実際面では保母の配置については保険制度上の問題を始めとする問題が今だ山積している状況である。この点は関係諸機関や経営側及び病棟スタッフによる実際上の理解と援助を求めていくことが望まれる。

次いで、他職種との連携からは、病棟による違いはあるものの様々な場への参加を通して情報交換やコミュニケーションをはかっている様子がうかがえる。それぞれの話題は医療・看護的な話題のみならず、子どもやその生活に関する内容も多く含まれており、保育的な視点で意見を述べる機会も多いことがうかがえる。この点では保育者としての役割が認められてきているとも言えよう。異職種間のコミュニケーションから、保育者は子どもの病状や看護の実際についての情報をとらえ保育上考慮すべき点を把握すると言ったように、子どもに関係する職種間の連携はトータルな医療をめざす上では望ましい方向性をとりつつあると言える。そして、なにより、場への参加を通し保育についての一層の理解を他職種に求めていくことが期待できよう。

また、業務の実際をみるとその内容は生活面の援助とともに看護に関わる業務が含まれていることが理解できる。ただし介助という点に意味を持たせてとらえていく必要はあろう。言うまでもなく、病棟は病気の治療を本来的な目的として生活する場である。入院児にとって、検査や与薬などの行為は日常必要不可欠な事柄になっていると考えられる。これらを生活の一部と考え、その受容過程の心理的な援助として介助を位置づけるならば、看護に関わる内容に保育者が補助的に関与することはあ

ながち否定することはできない。検査等に直接関わるのではなく、むしろ、介助と言うところに注目し、治療行為を受容し積極的に快復に向けて努力する子どもの心理的な準備とその際の痛みをわかち合うことは、信頼関係の中で心とからだをケアしていくという、協力者としての保育者の関与がぜひとも必要とされる領域であると考えられる。しかし、あくまで子どもにとって保育者は苦痛を与える存在であってはならないと言える。治療行為を子どもが受容する過程を支え、これらが円滑に行われるよう補佐するカウンセリングの知識や技術、また、看護や医療に関する知識と病状に応じたケアについての理解が望まれる。従って、医療保育を推進し、本来的な役割を十分に果たすためには、その基礎となる学習が必要であり、保育者養成のカリキュラムをはじめ養成課程の見直し・検討と共に、現職保育士の研修・再教育が必要となる。

最後に、保育について感じていることを見ると、多岐にわたって意見が述べられているが、中でも病棟における位置づけの曖昧さを訴えるものが多く、保育者のおかれている現状が反映されている。一方、保育職について感じていることの内容は、今後に向けた保育者の要求としてとらえることができる。病棟における不安定な位置づけの改善を望むものが多く、本来の仕事の内容をとらえた専門職としての存在意義を明確にしたいと言った意図がうかがえる。確かな位置づけを持ち、充実した保育活動を展開したいという姿勢もうかがえる。チーム医療とは言っても、まだ保育者の存在は十分な認知がはかられていないと言う一面を現している。保育に関しても改善すべき点は改善し、質の向上をはかり、役割や位置づけが明らかになるよう理解を求めながら改善していく必要がある。

#### 医療保育士の役割と専門職としての方向性

これまでの諸研究や本調査結果をもとに病棟における保母の役割をとらえると、子どもの生活並びに発達援助、環境構成、母親的役割、心理的サポート、病気の克服あるいは治療意欲の向上等々があげられる。また、保育職の導入効果として、遊びによるフラストレーションの解消、不安、抑鬱等の軽減や緩和、生活指導が認められている。このように、保母職が病棟におけるQOLの向上に貢献している事実は評価されながらも、導入がなかな

か進まず、導入されていてもその位置づけが不明確な一因に専門性の希薄さがあげられる。病棟内保育に関する学習や研究が組織的に行われるようになった歴史も浅く、現時点においてもその実績を検討しながら方法論を模索している段階であることも否定できない。このような中で発展的に病棟保育の将来性や保育職の専門性をとらえて病棟スタッフとして位置づけていく時、米国の小児病院におけるチャイルドライフスペシャリストの存在が大きな示唆を与えてくれる。

チャイルドライフスペシャリストは看護職とはセパレートして位置づけられており、遊びをとおして子どもに刺激を与えていくことや、子どもの様子を観察し発達のアセスメントをおこなう。また、子どもの日々の不安や恐怖を和らげ、手術・治療・検査を受ける子どもの心理的準備を助ける等々をその役割としている。

現状では保育職とチャイルドライフスペシャリストを同一視することは困難であるが、専門職化をはかる一つの方向性としつ参考になる点も多いのではないかと思われる。遊びを通して子どものニーズに応じた援助をしていることや、心理面を支えていく等の実際に果たしている役割が評価され、病棟という生活の場で発達途上にある子どもたちを支える存在としての保育者のアイデンティティを確立し、看護職とは役割を異にする専門職として位置づけられていくことが望まれる。

#### おわりに

調査結果をふまえ病棟の保育環境や保育職の現状、さらには、専門職化に向けての方向性について述べてきた。これらから物理的環境の充実をはかることや職務を明確にしていくことと共に、保育職の位置づけを明確にする必要性が理解された。病棟への保育士の位置づけのためには、医療制度上の問題や保育士養成過程のあり方、職務内容の明確化などの課題と共に保育士自身の保育への積極的な取り組みの必要性もうかがえた。今後課題を解決していく為の働きかけと併せて、保育士自身も日常の保育活動を充実させ質を高めていく努力が必要であろう。日常の活動を通して多くの人にその役割の理解をはかり専門職としての存在意義を提示していくことが求められよう。

また、実際に膨たしている役割に沿った専門職としての独自性を明確にすることが、病棟スタッフとして位置づけられる為には必要であろう。保育的な視点でト

タルに子どもをとらえ、他職種との協力関係のもの、医療・看護・保育が入院児全てに提供されQOLの向上が一日も早く実現することが望まれる。

本調査の実施にあたっては全国医療保育研究会会長・帆足英一、同調査研究部・及川郁子、窪田英夫、呉太善、帆足暁子諸氏の協力を得た。また、調査に協力して下さった病棟保育士の皆様に深く感謝いたします。

#### 文 献

- Barbara F. Weller著・鈴木敦子他訳：病める子どもの遊びと看護，医子書院（1998）
- 帆足英一編：全国病棟保母の実態と課題，病棟保母研究会（1997）
- 窪田英夫・鈴木裕子：病院小児病棟における保母職の導入（第4報），東京家政大学研究紀要第38集（1998）
- 窪田英夫・鈴木裕子：病院小児病棟における保母職の導入（第5報），東京家政大学研究紀要第39集（1999）
- 栗田佳江他：小児病棟における保母の有用性，第41回小児保健学会講演集（1994）
- 西元勝子・上野美代子・福島光子：入院児の遊びと看護 医子書院（1993）